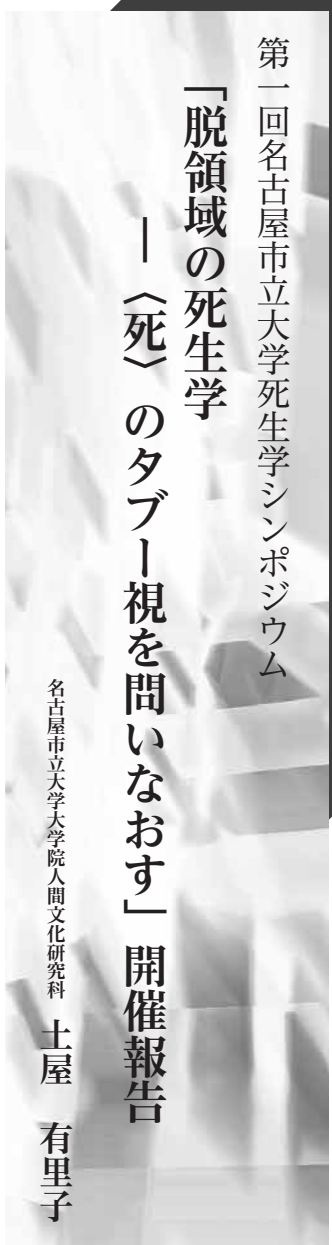


第一回名古屋国立大学死生学シンポジウム

「脱領域の死生学

—〈死〉のタブー視を問いなおす」開催報告

名古屋国立大学大学院人間文化研究科 土屋 有里子



平成二八年二月一八日(日)、さくら講堂において、シンポジウムを開催した。「死生学」は、人文社会や医療等、異分野の知を集めて、死にまつわるあらゆる課題に向き合う学問である。学問としては新しいが、少子高齢化が進み、自然災害が頻発する昨今、人のいのちの終焉にいかに向き合うかという意味で、重要性が高まっている学問である。

死は普段、私たちの輝かしい生の真逆に位置するものとして、日常からタブー視されている。死を考えるのは、命の終わりを意識し



ポスター

はじめる老年期で十分、死を考えるなんて縁起が悪い、といった考え方を持つ人も多いかもしれない。しかし、それで良いのだろうか？もう少し早くから、死に関する正しい知識の習得と準備を行えば、より望ましい形で最期を迎えることができるのではないか、そういった疑問を己の分野で考えて続けてきた面々が、七月に入り死生学研究会を発足させ、本シンポジウムの開催に向けて準備をしてきた。

シンポジウムは二部構成で、第一部は(ニュースの職人)として著名な鳥越俊太郎氏に基調講演をして頂いた。鳥越氏は自身のジャーナリストとしての体験や、がん罹患体験をもとに、若年時から死について意識し考えることの重要性を述べられた。「人間到る所青山あり」という格言や『方丈



鳥越氏

学研究科鈴木賢一教授、人間文化研究科吉田一彦教授の五名によるシンポジウムを行った。

まず土屋は、「死生学の可能性—過去の探究から未来の創造へ—」と題し、過去の日本と西洋における死の表現や格言を紹介したうえで、元来思索的、内省的な日本人は、死を考えるに適した精神性を持っており、その過去の蓄積を利用しつつ、医療における死の問題や次世代への死生観教育等、死にまつわる現代的課題に取り組む必要性を述べた。そして叡智と想像力をもとにあらゆる分野が協力して問題解決にあたる死生学の可能性を、「死生学曼荼羅」として紹介した。

記」等、人生と死を考える古来の言葉を用いつつの講演は、若い学生たちに力強いメッセージとして届いたのではないかと思われる。第二部は人間文化研究科土屋有里子、医学研究科明智龍男教授、附属病院平岡翠看護部長、芸術工

明智氏は、「死にゆく患者に対して現代の医学、医療は本当に貢献できているのだろうか？」と題し、割合的には二人に一人ががんに罹患する現在、がん診断後は自殺率が高まり、余命一ヶ月以内のうつ病はほぼ改善しないこと、がんの終末期患者の、喪失感を伴う精神的苦痛を緩和するためにカナダで案出されたディグニティ・セラピーも、日本では八六%の人に参加を拒否されたが、その中でも参加した人の満足度は高かったことなどを述べられた。早期から緩

和ケアに入った人（無理な化学療法をしない）の生存期間が延びたことなどもあげて、医療技術の進歩に過度に取り込まれた人間の死を再び考え直すために、医療と人文系学問の協働による、生死問題の再考が必要ではないか、とのことであつた。

平岡氏は、「看護の立場から—エンゼルケアを通して、ひとの生と死を考える—」と題して、看護部長として医療現場に携わる立場から、エンゼルケアは、エンゼルメイク（死化粧）とグリーンケア（遺族へのケア）を含む広義の死後のケアであること、死亡退院時の事務手続きや遺族の動揺が続く



討論

中、あらゆる配慮をしつつ行うエンゼルケアは看護者としてとても重要なことであると話された。死を迎える最期の瞬間だけが独立しているのではなく、生前からの連続のケアの延長線上にその時が来ること、だからこそ、生前のケアの中に充足感を得て患者の最期に向き合うことが大切、という言葉には、長年現場に携わってこられた重みと説得力が感じられた。

鈴木氏は、長年建築の立場から生と死の空間を見つめてきた経験を生かし、自身が設計された大宇宙の輪廻転生をあらわした太陽と月の墓石を皮切りに、昨今のきらびやかなロッカー式納骨堂、暗さや湿っぽさは無縁の火葬場、霊安室の現状などを示し、明るく楽しい雰囲気の小児救急病棟デザインを紹介された。病院の中にも、生と死の空間は混在するが、それらは多く別世界として認識されている。この大宇宙の中で生と死は循環し、つながっていくもの、という壮大な空間認識をもとに、死の空間のみを忌避し、タブー視することへの疑義を提示されたものであった。

吉田氏は、「日本の先人たちの複数の死生観—医療が発達する以前の時代—」と題して、先人達が

死とどのように向き合ってきたかを、冥界の観念、仏教の因果の思想、極楽往生、現世利益、葬式仏教の成立、祖先信仰の流れで概観し、日本人は思弁的な哲学や歴史叙述が苦手で、代わりに和歌や物語といった文学表現が得意であると話された。加えて現代日本人の信心は現世での幸せを求めることにあり、宗教的に死の問題を解決する、救済されることは難しい。過去の宗教にとって代わったものは現代ではサイエンスかもしれないが、サイエンスにおいても死は苦手分野なのだということであつた。その中で、自己の人生を語り、潜在化している自己の「ものがたり」を顕在化し、聞き手を得ることが、満足する死を迎えるために重要であるとのことであつた。

シンポジウム終了後、多くの参加者がアンケートに協力して下さった。その中で目立ったことは、人文系の学生が医学、建築系の発表を意義深いと感じ、医学、看護系の学生や従事者が人文系の発表に価値を見出したことであつた。限られた分野内では得ることが出来ない貴重な（気づき）を、分野の垣根を越えた今回のシンポジウムで示すことが出来たのだとしたら、主催者側としてこれほど嬉しいことはなく、今後の活動の励みとなる。

平成二九年四月には全学部学生を対象として、死生観アンケートを行い、その結果をもとに分野横断的な死生学の授業を構築したいと考えている。本シンポジウムで得られた知見と成果を停滞させることなく、今後の活動につなげていきたいと考えている。